

資料

図画工作科における幼小接続の視点を意識した授業資料 — 第1学年の造形遊び「木々とあそぼう」 —

中野 和幸*

Arts and Crafts Lesson Plan from the Viewpoint of Connection and
Cooperation between Kindergarten and Elementary School :
Artistic Play Activities Inspired by Tree Branches of Grade 1

Kazuyuki NAKANO*

【要約】

本稿は、2018年7月に佐賀大学教育学部附属小学校で行われた「授業力向上フェスタ2018」での、図画工作科の指導案及び授業研究会での資料である。造形的なアプローチから幼小接続を考える機会として、第1学年の造形遊びの授業を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を基に児童の活動の姿を見取ることの意義や課題について検討しようとしたものである。

【キーワード】

幼小接続、造形遊び、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、活動のみとり

1 資料について

本資料は、次の5つの内容で構成されている。

- ① 「授業力向上フェスタ 2018」における、図画工作科学習指導案「木々とあそぼう」
- ② 幼小接続の視点から本授業を設定した意図
(幼小接続の視点から ～造形遊びを通して、「10の姿」をみる～)
- ③ 授業参観時のシート
(造形遊びを通して「10の姿」をみる)
- ④ 図画工作科 授業研究会資料
(テーマ：こどもの姿をみとる —造形遊びと「10の姿」—)
- ⑤ 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
幼稚園教育要解説（平成30年3月 フレーベル館）より

①は、第1学年図画工作科の学習指導案である。本時の展開については、左上から右下に向かって、児童の活動の予測を示している。②は、本授業及び授業研究会を設定した意図を述べたものである。幼小接続は生活科を中心に行われるが、図画工作科においても、表現領域と密接なつながりがあり、特に造形遊びにおいては、その考え方が幼児教育と似ていることから、子どもの姿を見取ることが可能である旨を述べている。④は、授業研究会の主旨と会の進め方について、⑤は幼稚園教育要領解説で述べられている「10の姿」を、まとめたものである。

① 「授業力向上フェスタ 2018」における、図画工作科学学習指導案「木々とあそぼう」

第1学年2組 図画工作科学学習指導案

日 時 平成30年7月27日(金)8:40~9:25

場 所 図工室 指導者 中野 和幸

本授業のキーワード 木(材料)の種類と量 場の工夫 言葉かけ 幼小連携の視点

1 題材名 木々とあそぼう(造形遊び)

2 題材の構想

(1) 題材について

本題材は、線材としての木の枝や細長い木、面として平たく切った木、量感を感じる木の幹や丸太などを材料に、自分の感覚や気持ちを生かしながら、思い付いた活動を楽しむ造形遊びである。長さや太さの違う線材としての木々を大量に用意し、並べる、つなげるなどの活動を十分に味わえるようにする。平たく切った木や木の幹、丸太も用意することで、材料の形や太さ、手触り、量感の違いから、活動を思い付くことができる。自分なりの感じ方で材料を選んだり、並べ方やつなぎ方を工夫したりしながら、思い付いた活動を楽しみ、イメージを広げることができるであろう。また、進んで関わりながら木々と一体となるなど、体全体の感覚を働かせながら木々の世界に入り込んで活動を展開する楽しさを味わわせたい。材料、友達、場の雰囲気などと一体になり生き生きと活動し続けることで、児童はつくりだす喜びを味わい、このようにして身に付けた力は、今後の造形活動の重要な基礎となるであろう。

(2) 児童について

本学級の児童は、材料の形や色などから自分のイメージをもって造形活動を行うことができる。「ペットボトルキャップで遊ぼう」では、キャップを積み上げたり並べたりしながら、思い思いの活動を行った。活動終盤には、並んだキャップを迷路に見立てて、個人や友達で活動してできた形をつなぎ、学級全体でつながり一つの形となったことに、満足感や達成感を得ることができた。このように、自分が思い付いたイメージをのびのびと表したり、友達と一緒に活動を楽しんだりすることができている。本題材で用いる木々は自然の材料で、就学前に触れたり遊んだりした経験がある。しかし、これらを大量に用いて思い付いた活動を行うのは初めてであり、形や色が同じではない材料に、始めは戸惑いが見られる可能性がある。

(3) 指導について

そこで、始めは材料を絞り、線材としての木の枝や細長い木を中心に活動ができるようにする。図工室中央に山積みにした木の枝や細長い木をブルーシートで隠し、興味をもつように演出して、木々と出合わせる。その後は、自分の感覚や気持ちを生かしながら思い思いに造形遊びをすることができるように、教師は児童の活動を見守り、気持ちを汲み取りながら称賛したり励ましたりして、児童の造形活動への意欲を高める。そして、木々の特徴から思い付いた造形活動に向かうように、材料がたくさんあることを示唆したり新たな提案をしたりする。その際、指示的になり過ぎて児童の発想を狭めないように、児童の造形活動に寄り添った言葉かけや、活動が自然と広がるように、児童同士をつなぐ言葉かけを行う。場の設定では、木々から思い付いた活動が展開できるように机や椅子を片付け、広い空間にしておく。また、平たく切った木や木の幹、丸太など木々を、児童が気づいて活動に用いることができるように、活動場所に準備しておく。終末では、活動を楽しんで振り返ることができるように、木々が広がった図工室内の様子を見るときともに、児童のつぶやきから活動のよさや楽しさ、工夫についての発言を拾い上げて称賛し、価値付けを行うことで、満足感や達成感を高めたい。

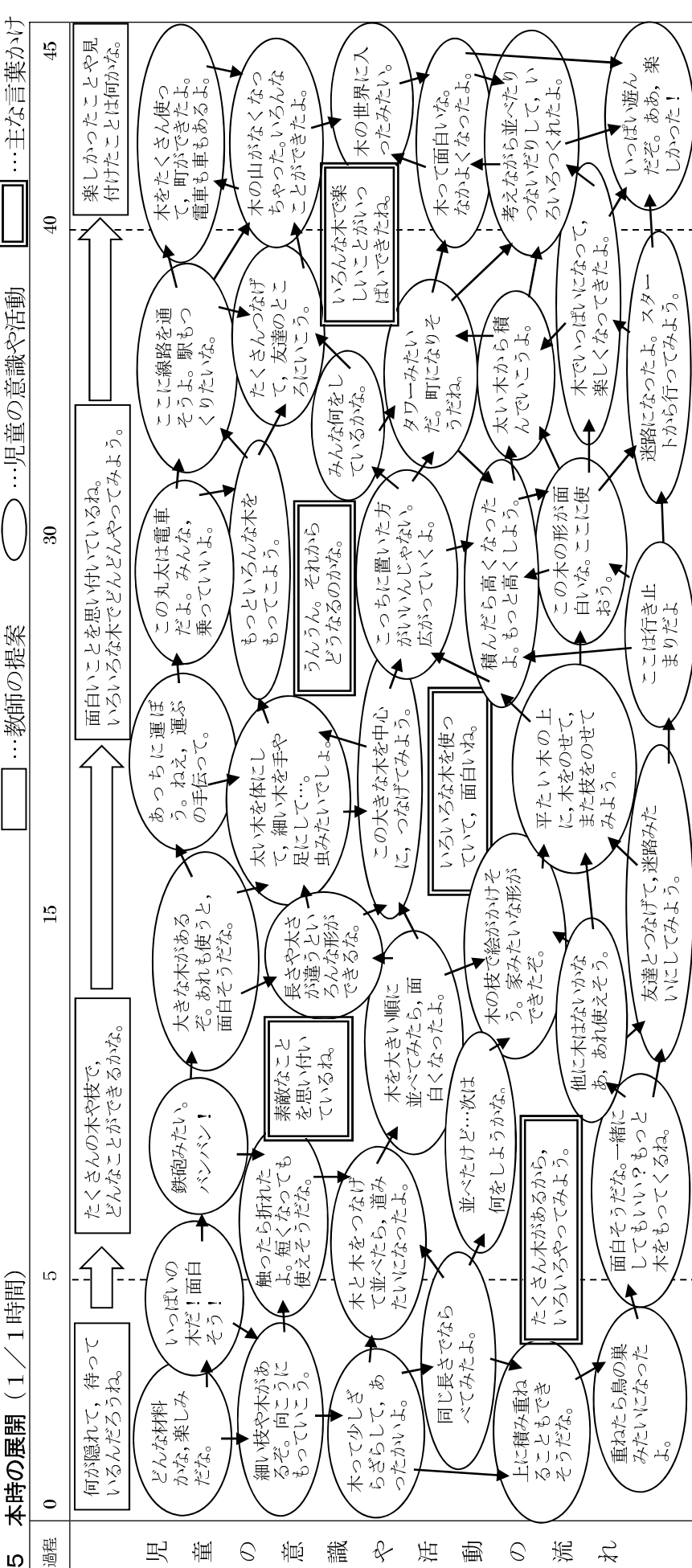
3 題材の目標

木の枝や細長い木などを、自分の感覚や気持ちを生かしながら、思い付いた造形活動を楽しむことができるようにする。

4 題材の評価規準

- ア 自分の感覚や気持ちを生かしながら、木々の並べ方やつなぎ方を工夫してつくっている。
 イ 木々の特徴や手触りなどから造形的な活動を思い付いたり、自分の感覚や気持ちを生かした活動を考えたりしている。
 ウ 木の枝や細長い木、平たく切った木、幹、丸太を使って、思い付いた造形活動に楽しんで取り組もうとしている。

5 本時の展開 (1/1時間)



1-(1) 材料への興味や活動が展開できるよりに、広い空間で行う。また、線材としての木々を並べたりつなぐ。見ながら活動の価値付けを行うとともに、進んで木々に関わり、活動を楽しんだ姿を認め、満足感や達成感を高める。

2-(1) 思い付いた活動を展開できるよりに、始めに大量の細長い木や枝と出合わせる。

2-(2) 並べる、折る、積み上げる、重ねる、つなげるなどをしながら、楽しく活動することができるようになる。

2-(3) アイメーや活動の方向を尋ね、活動や思いに共感したり称賛したりする言葉かけを行う。

2-(4) 活動が停滞している児童には、いろいろな木や枝と一緒に触れたり、友達と一緒に見たり促す言葉かけを行う。

3 木々の幹や丸太などを用意し、線的な材料だけでなく、面的、量的な材料も生かした活動ができるよりに、木々の特徴や感じなどを基にした活動や発言を価値付ける。

教師の働きかけ

② 幼小接続の視点から本授業を設定した意図

幼小連携の視点から ～造形遊びを通して、「10の姿」をみる～

1 「10の姿」とは

幼稚園教育要領等に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（表1）を指します。ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の5歳児修了時の具体的な姿であり、資質・能力の三つの柱を踏まえつつ、明らかにしたものです。

小学校低学年は、学びがゼロからスタートするわけではなく、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子供たちの資質・能力を伸ばしていく時期です。幼稚園等と小学校教員が、これらの「10の姿」について一緒に話し合うことで、接続期のこどもの姿が共有され、より円滑に、幼児教育と小学校教育との接続が図られると考えます。

表1「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- | |
|------------------------|
| ① 健康な心と体 |
| ② 自立心 |
| ③ 協同性 |
| ④ 道徳性・規範意識の芽生え |
| ⑤ 社会生活との関わり |
| ⑥ 思考力の芽生え |
| ⑦ 自然との関わり・生命尊重 |
| ⑧ 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 |
| ⑨ 言葉による伝え合い |
| ⑩ 豊かな感性と表現 |

2 『造形遊びを通して「10の姿」をみる』とは

学習指導要領においては、生活科を中心としたスタートカリキュラムが位置付けられています。造形的なアプローチから幼小連携を考える機会として、本授業及び研究会を設定しました。幼児教育は、環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して「10の姿」が育っていきます。造形遊びは、児童が材料などに進んで働きかけ、自分で目的を見つけて活動を発展させる中で、児童の資質・能力が育まれます。幼児教育と造形遊びは考え方が似ており、「10の姿」をみとりやすいと考えたからです。

そこで、本授業における児童の活動の姿を、「10の姿」を基にみていただき、幼小連携を考える機会としていただけると幸いです。なお、「10の姿」の全てが見られるわけではありません。また、到達目標として育ちを評価するのではなく、どのような過程で育まれているかを意識して参観されてみてください。

3 本授業の場の構成

図1は、本授業の場の構成とその意図を表したものです。児童は、最初に中央に置かれた木の枝や細長い木と出会い、活動を展開すると思われれます。その後、周りに用意された木々に気づき、活動に取り入れていくと考えます。中央から放射状に活動が広がり、床や棚の上など、図工室中に活動や木々が広がっていくことを期待しています。

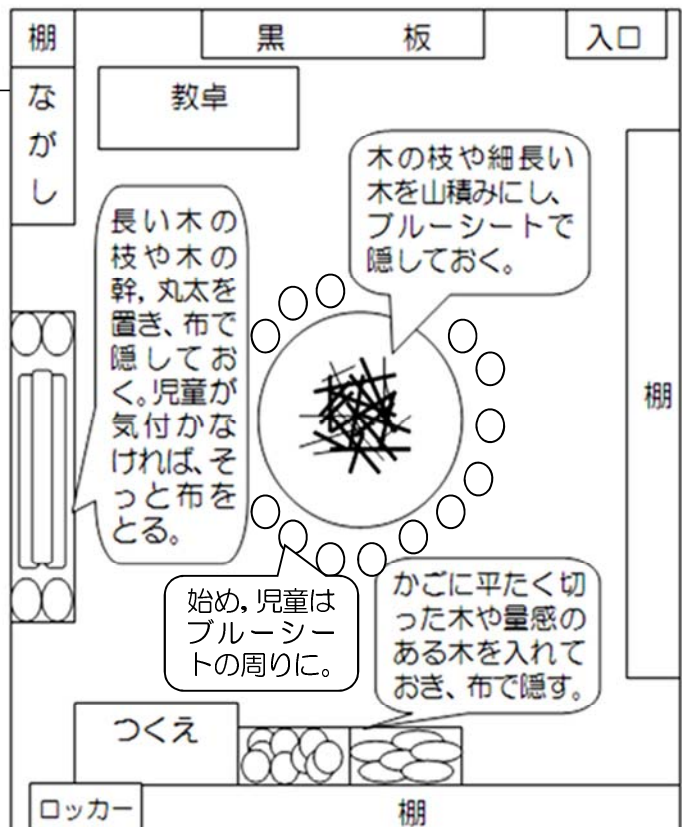


図1 本授業の場の構成

③ 授業参観時のシート（造形遊びを通して「10の姿」をみる）

造形遊びを通して「10の姿」をみる

「10の姿」とは、幼稚園教育要領等に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指します。次期学習指導要領においては、生活科を中心としたスタートカリキュラムが位置付けられています。造形的なアプローチから幼小連携を考える機会として、本授業及び研究会を設定しました。幼児教育は、環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して「10の姿」が育っていきます。造形遊びは、児童が材料などに進んで働きかけ、自分で目的を見つけて活動を発展させる中で、児童の資質・能力が育まれます。幼児教育と造形遊びは考え方が似ており、「10の姿」をみとりやすいと考えたからです。

そこで、「10の姿」を基に児童の活動をみていただき、幼小連携を考える機会としていただくと幸いです。なお、「10の姿」の全てが見られるわけではありません。また、到達目標として育ちを評価するのではなく、どのような過程で育まれているかを意識して参観されてみてください。その際、下の表を利用されてください。幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、2，3ページをご覧ください。

「10の姿」一覧表

(1) 健康な心と体	
(2) 自立心	
(3) 協同性	
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	
(5) 社会生活との関わり	
(6) 思考力の芽生え	
(7) 自然との関わり ・生命尊重	
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	
(9) 言葉による伝え合い	
(10) 豊かな感性と表現	

④ 図画工作科 授業研究会資料

図画工作科 授業研究会

テーマ:こどもの姿をみとる 一造形遊びと「10の姿」

1 主旨

次期学習指導要領が告示されました。改訂のキーワードとして、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進等が述べられ、図画工作科においても、目標や内容の改善がなされています。しかし、児童自らの行為や活動によって資質・能力が身に付き、感性や創造性が涵養されるという点は従来と変わらず、目標の三つの柱それぞれに「創造」が位置付けられたことで、一人一人の創造性に着目し、造形的な創造活動を目指すという教科の特質が浮き彫りになりました。

一人一人の創造性が存分に発揮される活動として、造形遊びが挙げられます。材料などに進んで働きかけ、自分で目的を見つけて活動を発展させていくからです。しかし、「楽しんでいるけど、どんな力が身に付いているのか分からない」「子ども任せで、先生は準備すれば終わり？」と、どちらかという批判的、懐疑的な意見を耳にすることがあります。実際、そう思われている先生もいるかも知れません。活動中の児童の姿をどのようにみとり、どのように関わるのかを考えることは、図画工作科の授業づくりの本質を考えることにつながるのではないのでしょうか。

また、幼稚園教育要領等においては、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることや、幼児期の教育を通して資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示されています。幼児期に、自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた姿であり、これらを意識して児童をみることで、円滑な接続ができると考えます。

そこで、この研究会では、造形遊びの授業を通して、どんな視点からこどもの姿を見ればよいのか。こどもが働かせている資質・能力をさらに伸ばすには、どのような手立てが考えられるかを、先生方と一緒に考えたいと思います。また、幼稚園、保育園、小学校の先生方から、日々の実践の中で、どのようにこどもの姿をみとり、指導に生かしているのかをお話いただき、幼小の交流の場となればと思います。先生方と一緒に、「主体的・対話的で深い学び」を行い、「こどもの姿の見方が分かった」「こんな手立てをとってみよう」と、明日からの実践が楽しみになるような時間にしたしたいと思います。

2 会の進め方

大きく、2つの柱に沿って、会を進めます。

① 公開授業について（授業の疑問点や問題点、代案、改善点等）

② こどもが働かせている資質・能力のみとりについて

（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」をもとに）

①では、造形遊びの授業研究会として、様々な視点からご意見をいただきます。

②では、こどもの主体的な活動である「遊び」の姿から、こどもたちが働かせている資質・能力をみるという、授業者の視点について、意見交換を行います。また、実際にこどもになったつもりで、造形遊びを体験し、どんな資質・能力を働かせることができるかを考えるとともに、その様子を授業者になったつもりで見守り、授業者の視点からこどもをみることについて考えていただききたいと思います。

最後に、助言者の先生方から、公開授業について、造形遊びについて、幼小連携について、それぞれご助言をいただきます。

3 助言者・司会者・授業者

助言者	神野こども園	園長	宮崎 祐治 先生
	佐賀大学教育学部	教授	栗山 裕至 先生
	佐賀大学教育学部	准教授	和田 学 先生
司会者	佐賀大学教育学部附属小学校	教諭	高添 比登美
授業者	佐賀大学教育学部附属小学校	教諭	中野 和幸
	授業	第1学年	「木々とあそぼう（造形遊び）」

⑤ 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

幼稚園教育要解説（平成30年3月 フレーベル館）より

1 幼稚園教育において育みたい資質・能力

- (1) 豊かな体験を通して、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、でき利用になったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

2 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(1) 健康な心と体	
具体的な姿	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見直しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
こどもの姿の例	「今日の片付けの時間までに、全部の段ボール箱の色を塗っておけば、明日の遊園地づくりに間に合う」「ここは、小さい組の子が通るので、ぶつかると危ないから場所を変えよう」と、遊びの目的に沿って、時間をうまく使ったり、場所を選んだりして、自分達で遊びを進めていく姿。
(2) 自立心	
具体的な姿	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
こどもの姿の例	「自分もこまをうまく回したい」と思い、できなくてもあきらめず繰り返し挑戦する姿。友達の様子を見たり、こつを聞いたりして考え工夫して取り組む姿。
(3) 協同性	
具体的な姿	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
こどもの姿の例	お楽しみ会をするために皆で話し合い、これまでの体験を思い出して、いつどこで何をするのか、飾り付け、会の進行の分担など、教師や友達と話し合い、楽しみながら進める姿。
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	
具体的な姿	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
こどもの姿の例	けんかの際、幼児が集まり、自分の体験を基に、友達の気持ちに共感したり、状況の解決のために提案したりする姿。
(5) 社会生活との関わり	
具体的な姿	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
こどもの姿の例	小学生や地域の人と一緒に活動する中で、相手に応じた言葉や振る舞いなどを感じ、考えながら行動しようとする姿。 地域の祭りを再現して遊ぶ過程で、それぞれの体験を伝え合ったり、祭に必要なものを作るために写真や実物を見たり、地域の人から話を聞いたりし、情報を伝え合うことの良さを実感する姿。

(6) 思考力の芽生え	
具体的な姿	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
こどもの姿の例	砂遊びで、砂を掘って樋をつなげて遊ぶ（トンネルづくり）。→片方から水を流すと、水がもう一方に上って流れ込むことを発見。→空のペットボトルをロケットに見立てて、水を流して飛び立たせよう→うまくいかず、友達と考えながら、繰り返し試す→上手くいく方法を発見・・・
(7) 自然との関わり・生命尊重	
具体的な姿	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
こどもの姿の例	冬に容器に入れていた水が凍り、氷の厚さを比べる中で、なぜある場所に置くと厚い氷ができるのかと疑問が生まれる。それぞれの場所へ行き、予想を立てたり考えたりして考えを深め、身近な自然に多様に関わっていく姿。 飼育しているウサギを年下の子に抱かせてあげ、「あったかいでしょう」「ギュッとすると苦しいから、やさしくね」などと、日頃のウサギとの関わりから感じていることを、年下の子に伝える姿。
(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	
具体的な姿	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
こどもの姿の例	二手に分かれて鬼遊びを繰り返し楽しむ中で、チームの人数や陣地の広さを同じにする必要性に気付き、人数を調整したり、陣地を歩測して確かめたりする姿。 遊びに必要なものをつくる際に、空き箱や紙などの形や大きさ、長さなどを大まかに捉え、自分のイメージに合わせて選び、図形の特徴を生かして様々に組み合わせながら考えた通りにつくり上げる姿。
(9) 言葉による伝え合い	
具体的な姿	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
こどもの姿の例	読み聞かせから「こもれび」という言葉を知る。散策中、木の下から空を見上げ、「キラキラしてる」「まぶしいね」と話す。すると、ある子が「これ、こもれびだ」と言う。「こもれびって、キラキラしているね」と、会話が続き、近くの友達にも「見て、これもこもれびだよ」と伝える。「下もきれいだよ」「あっちもあるよ」と、気付いたことを伝え合う姿。
(10) 豊かな感性と表現	
具体的な姿	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。
こどもの姿の例	グループで劇をつくる場面で、役に応じて話し方や動き方を工夫する、必要ない賞や道具を身近な素材や用具などを使ってつくり上げる、効果音を考えるなど、表現すること自体を楽しむ姿。友達と一緒に工夫することで、新たな考えを生み出すなど、より多様に表現できるようになっていく過程を楽しむ姿。

これらは、到達すべき目標ではなく、個別に取り出されて指導されるものではないことや、全ての幼児に同じように見られるものではないことに、十分留意する必要がある。